

International Development Center of Japan
IDCJ 国際開発センター

アフリカにおける中国の進出

政府開発援助（ODA）の業務などで、アフリカ諸国を訪れる日本人は少なくありません。私自身も昨年の秋までエチオピアのプロジェクトに参加していました。アフリカにいる日本人であれば、年々まわりで中国人の数が増えていることを実感していると思います。エチオピアでも首都アジズアババで見かける中国人の数はどんどん増えてきました。それに伴い、数か月に一軒程のペースで新しい店ができ、中華レストランの数も増えてきました。

アフリカ大陸全体にどのくらいの中国人が滞在しているかは、

はっきりとした統計がありません。南アフリカにはアフリカで最大の中国人コミュニティがあり約30万人が居住していると言われています。他では、ナイジェリア、ガーナ、スーダン、エチオピア、タンザニア、アンゴラなどでの居住が多く、それぞれ数万人程度の中国人が暮らしています。在アフリカ中国人の中には、国営企業の実施するプロジェクトに従事するエリートも少なくありませんが、多くは様々なビジネスをするために地縁、血縁を頼ってやってきた民間人です。

多くの中国人がアフリカに押し寄せるようになったのは、せいぜい10年程前からです。エチオピア人に聞いても、5～6年前には中国人を見たことはなかったと言います。あまりに多くの外国人が短期に来訪すると、現地で様々な摩擦が生じます。中国商人が中国製の安価な商品を持ち込むので、地元の製造業が淘汰され、小売り・流通業が混乱することがあります。山岳地帯で砂金が採れるガーナでは、中国から無許可の採掘業者が2万人も押し寄せ、大きな社会問題になったと報道されています。アフリカ諸国で地元の人と話していても、「中国人に一軒家を貸したら、いつのまにか20人くらい住んでいた」「中国人は現地人労働者の扱いがひどい」といった苦情を聞くことがあります。市民レベルでは中国人への反感や違和感があるようです。

しかし、政府レベルでは中国の進出は概ね歓迎されています。中国政府は巨額の投融資を行い、インフラ整備や資源開発に大きな貢献をしてくれたと感謝されています。国営企業が運輸や電力、通信セクターでインフラを整備し、エネルギーや鉱物資源を採掘します。一方、民間人は中国から安価な製品を持ち込んで販売し、次第に現地生産も始めます。こうした経済的な進出が、現地経済を活性化させています。実際、全世界における2012年の実質経済成長率の上位30カ国のうち、約半数がサブサハラ諸国になっています。

これまで西側諸国は、アフリカ諸国に対して「構造調整」を促し、重債務を削減し、そしてミレニアム開発目標の達成を求めてきました。しかし、アフリカを飢餓と貧困の不幸から引き上げるには目立った成果をあげることができませんでした。一方、アフリカを純粋な市場として、あるいは資源の供給元として入ってきた中国の方が、経済成長という点では優れた成果をあげているように見えます。

もちろん、中国の進出は様々な社会問題、環境問題、汚職問題などを新たに引き起こしている側面もあります。市民の反中感情は、近年の経済成長の成果が社会で広く享受されていないことの裏返しかもしれません。しかし、中国の進出をきっかけに、これまであまり注目されていなかったアフリカが、グローバリゼーションの潮流に向けて押し出されてきたのは事実です。ビジネスという目でアフリカが見直されるようになったのも、中国が進出したことによる側面が大きいです。日本企業もアフリカの市場や資源に大きな関心を示すようになってきました。これから中国とアフリカとの関係がどうなっていくのか、日本の開発協力や企業投資はこの関係にどう向き合うのか、いずれも目が離せないテーマです。

(文責：国際開発センター 主任研究員 三井 久明)



モザンビークの中国商工会議所